| 報告番号 | ※　　第　　号 |
|---|---|

# 主　論　文　の　要　旨

| | |
|---|---|
| 論文題目 | アルゼンチンのナショナリズムとフォークロアの思想史<br>―イスパノアメリカ知識人による人種・民族的自画像の系譜―<br>(Argentine Nationalism and an Intellectual History of Folklore: Aspects of Ethnoracial Self-images in a Hispanic American Country) |
| 氏　　名 | 遠藤 健太 |

## 論　文　内　容　の　要　旨

本研究は、アルゼンチン共和国の知識人たちが言論活動を通じて描き出してきた国民文化像の諸相を考察する、思想史的研究である。本研究の目的は、第一に、19 世紀後半から 20 世紀前半という時期にアルゼンチンにおいてみられた「土着主義」的な思潮・言説の存在を示し、その特質を明らかにすることである。ここで言う土着主義とは、19 世紀中葉以降の支配的思潮であった欧化主義（西欧の文明を信奉し、その導入によって近代化を実現しようとする思想）に抗して、伝統や土着性を拠所とする国民性の復権を志向した思潮・言説を指す。本論では、この土着主義の系譜を辿りながら、とりわけ近代化に抗する土着的存在としての「スペイン」および「インディオ」がいかに表象されてきたかという点に着目して、アルゼンチンにおける人種・民族的自画像の諸相を示すことを試みる。

そして第二の目的は、国民文化像をめぐる議論に参画した知識人のなかでも、特に 20 世紀前半の民俗学者たちの存在に焦点を当てて、かれらの研究・言論活動の根底にあった思想の特質を明らかにすることである。とりわけ、この時期のアルゼンチン民俗学が、土着主義と実証主義（欧米由来の近代科学を信奉するという、欧化主義の基調を成した思想）という二大思潮の稀有な合流点を成していたという点に着目して、その思想史上の意義を論考する。ラテンアメリカ思想史において土着主義と実証主義は、しばしば対蹠的な、相容れないものとして捉えられてきたが、実のところ、「国民性」や「精神」的なるものの希求（＝土着主義）と近代科学の体系的理論・方法への固執（＝実証主義）とを両立させようとした知識人たちも確かに存在したのであり、こうした存在の典型が民俗学者たちであったと言える。本論では、20 世紀前半のアルゼンチンの民俗学者たちの著述を分析して、かれらのなかにみられた土着主義的意図と実証主義的意図の共存と相克の様相を浮き彫りにし、ひいては、そうした相克を経てかれらが掲げるに至った国民文化像のありようを明らかにしていく。

本論は 4 つの章から構成される。前半の二章では、19 世紀後半から 20 世紀初期のアルゼンチンにみられた、欧化主義と土着主義の対立の諸相を分析する。そして後半の二章では、その後の民俗学者たちの研究・言論活動を通じて描き出されたアルゼンチン文化像の諸相を分析する。

第 1 章では、20 世紀初期のアルゼンチンにおいて、マヌエル・ガルベス（Manuel Gálvez, 1882～1962 年）およびリカルド・ロハス（Ricardo Rojas, 1882～1957 年）を中心とする「百周年世代」の知識人らによって展開された、ナショナリズム思想の特質について考察する。まずは、百周年世代のナショナリズム思想の基調としての、物質主義批判（＝精神の称揚）とコスモポリタニズム批判（＝伝統・土着性の称揚）という性向を確認し、そのうえで、この世代のナショナリズムのなかに、国民性の表象としての「スペイン性」を専ら称揚する言説（＝「イスパニスモ」言説）と、同時に「インディオ性」の存在も尊重しようとする言説（＝「メスティシスモ」言説）とが併存していたことを示す。そのうえで、かれらのナショナリズムが、移民や外来文化の流入を拒絶するという排外主義のごとき思想だったわけでは決してなく、「国民性の復権」と「外的要素の包摂」を両立させようとするような、現実主義的な折衷思想であったということを指摘する。また、この世代の知識人のなかに、ナショナリストでありながら同時に欧米の近代科学の導入にも尽力した者がいたことを指摘して、その代表的人物としてロハスを挙げ、「科学」と「芸術」、実証主義とナショナリズムの両立を目指した彼の「近代人文学」構想の実態を明らかにする。

第 2 章では、時代を遡って 19 世紀のアルゼンチンの言論界に目を向け、スペイン王立アカデミーのイスパノアメリカ支部創設計画をめぐって発生していた「国語論争」の経緯を辿りながら、欧化主義（＝反スペイン派）と土着主義（＝親スペイン派）の論客たちの間で展開されていた対立の構図を浮き彫りにする。特に、この論争において親スペイン（親アカデミー）の側に立った論客たちが一貫して「権威主義（＝反民衆主義）」の思想を表明していたこと、すなわち、かれらがスペインの古典文学等の「権威」を賞賛した一方で、民衆の間で育まれる文化を蔑視していたということを指摘する。これを踏まえて、次に、改めて百周年世代の思想家であるリカルド・ロハスの著述に立ち戻って、彼の国語論／国民文学論を読み解き、その特質を考察する。特に、ロハスの親スペイン思想が 19 世紀のそれとは異なり、「民衆主義（＝反権威主義）」の思想に根差したものであったことを示して、ここに土着主義と民衆主義の結合点を見出す（この結合こそがロハスをフォークロア研究へと導いたものであったと言える）。

第 3 章では、20 世紀前半のアルゼンチン民俗学を牽引したリカルド・ロハスとフアン・アルフォンソ・カリーソ（Juan Alfonso Carrizo, 1895～1957 年）という二人の学者の研究・言論活動に焦点を当て、かれらのフォークロア（口承詩）研究の背後にあった思想の特質を分析する。まずは、ロハスとカリーソのフォークロア研究のなかに、伝統・土着性の復権を目指すナショナリズム的意図と、近代科学としての民俗学の確立を目指す実証主義的意図とが併存していたことを示す。そのうえで、両者が国民文化観の齟齬等を原因として対立・訣別に至った過程を辿る。ここでは特に、イスパニスモの思想に根差していたカリーソが、アルゼンチン文化とスペイン文化の同一性を際立てようとしたのに対し、メスティシスモの立場にあったロハスが、スペイン性とインディオ性の混淆によって形成された（スペイン文化とは異なる）アルゼンチン文化の独自性を強調しようとしていたという対立構図を浮き彫りにして、「親スペイン」と「親インディオ」の間にあった両義的な関係性（いずれも土着主義でありながら、国民文化観においては相容れないという関係性）を浮き彫りにする。

第 4 章では、20 世紀中葉に音楽・舞踊研究の分野で顕著な業績を残したカルロス・ベガ（Carlos Vega, 1898～1966 年）という学者に焦点を当て、彼の研究・言論活動を通じて描き出された国民文化像の

ありようを分析する。まずは、ベガの音楽・舞踊研究が学問的体裁に固執するという実証主義的意図に根差したものであったことを確認し、そのうえで、彼の研究がロハスやカリーソと同様のナショナリズム的意図に動機づけられたものでもあったのか否かを検討する。特に、ベガによる研究対象の選別という行為に着目しながら、その根底にあった彼の思想・価値観の分析をおこなう。その作業を通じて、ベガによる研究対象の選別が徹底して理論・方法上の制約に基づいてなされたものであったということを示し、そこにおいて、特定の人種・民族的要素を国民文化の表象として際立てようとする意図（欧化主義やナショナリズムのごとき意図）の介在はなかったということを明らかにする。そしてベガが、こうして自身の確固たる国民文化観を欠いていたがゆえに、従来の欧化論またはナショナリズムという枠組みを超えた、欧州性と土着性、近代性と伝統性とを同時に包含するような新しいアルゼンチン文化像を掲げるに至ったことを指摘する。

以上の論考を通じて、総括的な結論として導き出されるのは、第一に、アルゼンチンの土着主義における「スペイン」の特別な重要性である。アルゼンチンでは、近代化に抗する当事者としてのいわゆる有色人種（インディオや黒人）の人口が相対的に寡少であったがゆえ、インディヘニスモ（インディオ文化称揚思想）やアフロ系文化称揚思想のような思潮が大きな勢力を得ることはなかった。それゆえラテンアメリカの人種・民族をめぐる歴史研究のなかでも、同国は例外的な「白人国家」として片づけられてしまう場合が多く、同国の土着主義に関する研究の蓄積も相対的に少なかった。しかし、本研究が明らかにするように、アルゼンチンにおいても土着主義（＝反欧化主義）の思想が、主として「親スペイン」思想（専らスペイン性を称揚した「イスパニスモ」、ないし、スペイン性とインディオ性との混淆によって生じたアルゼンチンの固有性を称揚した「メスティシスモ」）という形で確固として存在していたのであった。

そして第二に、20 世紀前半のアルゼンチン民俗学にみられた土着主義（ナショナリズム）と実証主義との相克という現象自体が有していた両義性である。近代化の過程で喪失の危機に瀕している伝統・土着性（＝フォークロア）を救出するというナショナリズム的意図と、学問的体裁に固執して科学的客観性を尊重するという実証主義的意図とは、現実には両立困難なものであったため、ロハスやカリーソの研究・言論活動のなかにも少なからぬ「矛盾」がみられたことは否めず、この点においてかれらの思想の精度を否定的に論評する余地はある。しかし一方で、伝統や国民的なるものを救出するという内発的な衝動（＝ナショナリズム）と、そうした自身のナショナリズムを外側から抑制しようとするような使命感（＝実証主義）とが、矛盾しながらも共存していたがゆえにこそ、かれらの民俗学的貢献が成り得たのだということも、本研究を通じて明らかにされるはずである。